



連続ドラマW『石つぶて〜外務省機密費を暴いた捜査二課の男たち〜』

みんなの語り部 3 民放史

題字 中川 順

WOWOW『ドラマW』の歩み

社会派ドラマで《放送ウーマン賞2017》を受賞して・・・

WOWOW 制作局 ドラマ制作部プロデューサー 岡野真紀子

2008年4月。地上波のテレビドラマに携わってきた私にとつて、衝撃的な作品が放送された。それが、WOWOW最初の連続ドラマ『パンドラ』である。

主演…三上博史さん、脚本…井上由美子さん、監督…河毛俊作さんという豪華メンバーで作られたこの作品を見て、ショックを受けないテレビマンはいなかったと思う。

なぜなら、「タブー祭り」だったからである。

私は2004年に学習院大学を卒業し、新卒採用でテレビドラマの制作会社テレパックに入社し、そこから5年間に渡り、地上波ドラマの助監督、アシスタントプロデューサー、プロデューサーをやらせて頂いた。その中で私は、プロデューサーサイドの重要な仕事の一つである、スポンサー対応も行ってきた。

脚本作り、美術打ち合わせ、撮影現場において、スポンサーの商品が正しく使われているのかをしっかりと確認し、現場に伝えていくという仕事だ。そのほか、スポンサーに入って頂く企業の商品に関する誤解を視聴者に与えないよう、細部に至るまで注意を払うという仕事である。テレビビジネスの成り立ちを考えれば、このことは当然、なくてはならない大切な仕事であり、我々現場スタッフも、視聴者やスポンサーに喜んでいただける作品を作りたいと心から願っていたため、何の疑問も抱いていない。しかし、この仕事は、重要な仕事とはいえず「作品性」や「クオリティ」というところは、別視点の仕事なのだ。

そんな時、『パンドラ』を観た私は、驚きと共に嫉妬さえ覚えてしまったのだ。

「交通事故」「薬品に関する悪事」「政府の闇」「企業の闇」…次々と繰り上げられるタブーの連続を目の当たりにした時、一番に感じたこと。それは、このドラマはダイレクトに視聴者に向けて作られているのだ、ということ。作り手が面白いと思っていることを、フィルターを通さず、純粋に面白い形で突き付けられていることが衝撃だったのだ。

この連続ドラマW『パンドラ』と出会ってから10年、私自身がWOWOWへ転職し、共に歩んできたドラマの軌跡をここに書きたい

と思う。

『パンドラ』を観た直後、すぐに私はWOWOWに対し企画を持ち込んだが、プロデュース作品はわずか数本という実績しかない私の企画がそう安安と通るわけもなく、気づいたら転職試験を受けていた。

そして2009年5月、WOWOWへ中途入社した私は、『WOWOWらしさ』を求め、研究を始めた。そして、2つの魅力にたどり着いたのである。

まず一つは、当時WOWOWは開局20周年を迎える前であり、まだテレビ局として10代であるという若さゆえの、青春時代を謳歌しているパワーがあったのだ。子供と大人の中間であり、一番ワガママで、一番パワフルで、一番冒險心が旺盛なお年頃。それが、当時のWOWOWドラマの印象であった。そのパワーは、企画選定にも現れ、また撮影現場や作品にも現れていた。『空飛ぶタイヤ』(2009年放送)はまさにその象徴とも言える作品で、タブーとされるテーマを臆することなく真正面から描き、WOWOWにしか出来な

い作品の代表格となった。

そしてもう一つの魅力。それは、入社してから気づいたのだが、WOWOWにはドラマの歴史が浅い故の『謙虚さ』がある。

特に視聴者に対して謙虚な姿勢でものづくりに挑んでいたのだ。

現場のロケ弁一つとっても視聴者から頂いている視聴料から出ているのだ、という意識のもと、絶対に面白い作品で恩返ししなければならぬのだ、という責任感のもと、もの作りに没頭する。それはシンプルで心地の良いもの作りの姿勢であり、今も我々が一番大切にしていくものである。

そして、スタッフ、キャストに対しても同様である。先輩たちから聞くと、最初、WOWOWのオリジナルドラマに誰も見向きもしてくれず、スタッフキャストを集めるのが本当に大変だったという。歴史もなければ存在も知られていない。その中でどう信頼を得れば良いのか、どうしたらドラマ作りをコンスタントに続けられるのか、常に手探りだったという。先輩たちがそうやって道を切り開き、

整えてくださったからこそ、今のWOWOWドラマがあるのだと常々思っている。改めてドラマW立ち上げ当初の作品を観ると、一つ一つ、本当に丁寧に作られている。巨匠監督の元に一流スタッフと一流キャストが作品性を純粹に求めて結集した、そんな作品ばかりだ。

久世光彦監督による『センセイの靴』、三池崇史監督による『交渉人』、市川崑監督による『娘の結婚』、大林宜彦監督による『理由』、廣木隆一監督による『4TEEN』、原田真人監督による『自由戀愛』、鶴橋康夫監督による『ぶるうかなりや』など、錚々たる監督陣が名を連ねる。当時、WOWOWがオリジナルドラマを作っていること自体が認知されていなかったため、映画界、ドラマ界で数々の名作を残されてきた監督たちの力を借りながら、ドラマ作りの経験を積んでいたという。その時の製作経験や人脈構築がWOWOWにとつての宝となり、確実に今に繋がっている。

それはやがて当時は夢にも思っていなかった連続ドラマの開発につながり、『パンドラ』が生まれ、

今では土曜・日曜夜10時というふたつの2枠において、連続ドラマを製作し続けているのだ。

ここまでは、外から入った私が客観的に見たWOWOWドラマについて書いてきたが、ここからは自分もプロデューサーの一人として作品作りに携わる上で大切にしてきたこと、感じたことなどを書いていきたい。

最初の作品は2010年に放送したドラマWスペシャル『なぜ君は絶望と戦えたのか』という作品であった。



日本のドラマ界の歴史を長年に渡って築き上げてきた石橋冠監督にメガホンを取って頂き、WOWOW初出演の江口洋介さんに主演をつとめて頂いた。この作品はまさにWOWOWらしさを追求した作品ではあったが、同時に企画成立・放送までの間、いくつもの壁が立ちほだかつたのも事実だ。

この作品は、光市母子殺害事件の被害者遺族である本村洋さんの闘いを近くでずっと見守り、取材をし続けてきたジャーナリスト、門田隆将さんのノンフィクション著書『なぜ君は絶望と戦えたのか 本村洋の3300日』をドラマWスペシャルとして2夜連続前後編でドラマ化させていただいた。最初に議論になったのは、当時光市母子殺害事件がまだ係争中であり、世間の注目があまりに高い裁判であったため、世論を誘導しかねない本作をドラマ化すること自体がどうなのか、というものだった。

しかし、我々は裁判の行方や死刑制度の是非を描きたいわけではなく、奪われた家族のために必死に裁判、事件、そして世間と向き合い続けた本村さんの戦いの軌跡

を描きたいと思い、そしてそこから人を愛すること、犯罪を憎むこと、人として生きることはいかに素晴らしいか、ということ伝えたい。たかったのだ。

この現場の思いを会社は無視することなく、慎重に議論を重ね、係争中ではあるが、制作そして放送すべき意義のある作品として承認を得ることが出来た。今でもその会社判断に対し、私はひとりのプロデューサーとして敬意を抱いている。作品性を重んじ、作り手の意義を大切にすることで、過度な自主規制をすることなく、常に挑戦的なドラマ作りに勤しむ、それこそがWOWOWの存在価値なのだと思っている。

制作に踏み切ったこの「なぜ君」だが、石橋監督はあるルールを決めよう、と提案した。それは、この事件をテーマとして扱う上で、絶対にやってはいけないことを決めたのだ。まずは我々の視点が偏らないようにすること。そして、実在する事件に関わるすべての立場の方、すべての職業の方を絶対に傷つけてはならないのだ、ということだ。そのためにあらゆる角度からこの事件を見つめ、何度も

何度も話し合いを重ね、本作り、撮影に挑んだ。

有難いことに、本作は、その年の文化庁芸術祭テレビ部門・ドラマの部で大賞を頂くことが出来た。改めて、原作の門田隆将さん、そして、監督の石橋冠さんをはじめとするすべてのスタッフ、江口洋介さん、眞島秀和さんを初めとするキャストの皆様から御礼を申し上げます。

次に、WOWOW 20周年記念企画として制作したドラマWスペシャル『倉本聰 學』(2012年放送)についてここに記述したい。



「倉本聰 學」集合写真

日本初の「有料」民間衛星放送が遂に二十歳になるということで、記念企画の募集が行われた。その際、私が最初に入社したテレビドラマ制作会社・テレパックスの尊敬する大先輩である小橋智子さんから「倉本聰さんの映像化不可能と言われた幻のシナリオがある」という話を聞いたのだ。早速読ませて頂くと、言葉では簡単に表現できない、凄まじい衝撃と胸の奥底に広がる深い感動を覚えた。倉本聰さんがシナリオを通して訴えた怒り、悲しみが胸にダイレクトに響く、もの凄いシナリオだったのだ。そしてすぐに当時の上司である小玉滋彦制作局長と峯崎順朗ドラマ部長と共に、富良野へ飛んだ。倉本聰さんと言えば、テレビドラマっ子だった私にとって神様のような人だ。初対面の瞬間は、人生のどのタイミングよりも緊張した。しかし、お目にかかる、柔らかいお人柄の中にある、世の中とテレビドラマに対する厳しく毅然とした姿勢にすぐ釘付けとなった。

上司はその夜に言った。テレビドラマを志すものとして、倉本聰さんとお仕事をするのがいかに

重要な経験になるか、そして、何としてもこの作品でWOWOWの20周年を飾りたい、と。ここからWOWOW20周年記念企画『倉本聰 學』プロジェクトが始動したのだ。

まず、この『學』という作品のあらすじを記したい。ニューヨーク在住のエリート商社マンを両親に持つ、13歳の少年、學(高杉真宙)はパソコンだけを友達に、東京でひとり暮らしをしていた。ある日、學はパソコンを勝手にいじった近所に住む4歳の少女に激昂し、思わず突き飛ばしてしまい、少女は絶命する。恐怖に駆られた學は遺体を遺棄するが、すぐに発覚し、マスコミを騒がせる大事件となる。學は一切の感情に蓋をするように言葉を発しなくなり、生きる気力さえ失ってしまう。

そんな學を引き取った元南極越冬隊員の祖父、信一(仲代達矢)は、自らの命を懸け學を人として再生させることを決意し、ある計画を実行に移す。それは、文明から遠くかけ離れたカナダのロッキー山脈の中で、人として生きる意味、活力、愛、力を自らの命と引き換えに、学ばせていく、そういう物語だ。祖父は言う。「文明とは何か。友人とは何か。家族とは何か。そして即ち、生きるとは何か」と。シナリオには、學を命の危険に晒す巨大熊、グリズリーが登場する。そのほかブラックベアも登場し、少だけ學と心を通わせるシーンがある。それだけではない。自ら鹿を狩り、食べ、生命に感謝するシーンや、13歳の學がロッキー山脈内で遭難するシーン、急流で溺れかけるシーンなど、驚くべきシーンの連続なのだ。しかし、雨宮望監督と我々はこのシナリオに魅せられていた。CGを使うことなくしつかり表現するため、カナダへと飛んだのだ。そこで私は自分の経験史上最もギャランティが高く、わがままで危険なキャストイングを経験することになる。それが、カナダ在住のグリズリーくんだ。

その後もスタッフキャストの安全性を第一に、一丸となってシナリオ一行一行を丁寧に工夫しながら撮影に挑んでいった。WOWOWの二十歳を記念するドラマ企画に、このような作品を制作できたことは大変貴重な経験であり、その上層部の姿勢にWOWOWドラマの未来を感じたのだ。

ドラマ作りの実績や経験、人脈は地上波には絶対に敵わない。だからこそ、私たちは好奇心と挑戦心を常に抱き、プレミアムペイチャネルであることを武器に、WOWOWにしか出来ない企画を模索し続けなければならないのだ。

続いて、今回、放送ウーマン賞を頂くきっかけとなった連続ドラマ『石つぶて〜外務省機密費を暴いた捜査二課の男たち〜』(2017年放送)について書いていきたい。

この作品は、私にとって、もの作りの姿勢という意味でも大きな転機となる作品となった。

私はドラマ作りにおいて、一番大切にしているものは何か、と問われると必ず「出逢い」と答える。プロデューサーの仕事というものは、特に何か資格があるわけでもなく、他のプロフェッショナルな仕事(例えば撮影部・照明部・演出部など)に比べ、何か専門的な技術もなければ特技もない。その中で一番大切なことは何か、それは、どんな「仲間」と「ものづく」が出来るか、である。もちろん作品を企画発案してからシナリオ作り、キャストイング、スタッフイング、準備、撮影、仕上げ、宣伝、放送というすべての過程に携わっている人間はプロデューサーしかない。だからこそ、ドラマ作りは、たくさんの才能豊かなプロたちを集めて、自分が文化祭の実行委員長のような気持ちで、視聴者にお届けできるまで邁進し続けるのだ。

美しいのだ。

美しく、遅しく、感動的な人間ドラマがそこにあるのだ。『しんがり』山一證券 最後の聖戦』(2015年放送)も『石つぶて』も制作過程で何度も清武さんと打ち合わせを重ね、丁寧に構築していった。だからこそ、登場する人物像はリアルであり、当時の臨場感をしっかりと表現できたのだと思う。そして次に若松節朗監督である。私はドラマWスペシャル『尾根のかなたに』父と息子の日航機墜落事故』(1012年放送)で始めて一緒に『チキンレース』(2013年放送)『しんがり』山一證券 最後の聖戦』と続き、本作が4作目となる。若松監督はいつも『今回の挑戦したいこと』をご相談すると、まるで少年のようにキラキラした目で乗り出してくださる、そう言う監督である。

『石つぶて』のテーマは激苦だったと思う。外務省機密費流用事件である外務省を相手に負け戦に挑む、という苦すぎるテーマなのだ。そこには重要な砂糖が存在する。それは、佐藤浩市さんが演じてくださった、主人公・木崎陸人の魅力

的な人間性なのだ。偏屈で無骨で部下にも上司にもしたくないようなこの男。しかし、時々垣間見えるチャーミングさや、優しさ、人間らしさにぐっと引き込まれる。この主人公がドラマの『砂糖』となり得たのは、佐藤浩市さんのおかげである。佐藤さんはこの『石つぶて』の主人公・木崎をとことん深掘りして人間臭く演じ切りながらも、製作者の一人として、いかに視聴者に面白い、意義のあるドラマを届けられるか、ということもいつも一緒に考え続けてくださった。この現場は常にデイスカッションが出来る現場であった。それは、キャストと監督、プロデューサーだけでなく、助手さんも含めたすべての部署のスタッフ一人一人が責任と意思を持って現場に臨めるよう、佐藤さんは常に現場にデイスカッションの場を設けてくださったのだ。また、江口洋介さんもそうである。『なぜ君』しんがり』『私』という運命について』(2014年放送)と一息一息させて頂いている方が江口洋介さんであるが、江口さんは常に全力で作品と向き合い、そしていつも想像を超える登場人物像を練り上

2016年に開局25周年記念企画として全10話制作した『コールドケース〜真実の扉〜』の第二弾



コールドケース〜真実の扉〜

あ。そしてもう一つ、この作品についてここに記したい。それは、現在絶賛製作中の連続ドラマW『コールドケース2〜真実の扉〜』である。

である。この作品は、2003年から2010年まで全7シーズンにわたりアメリカ・CBSで放送され高視聴率を記録した『コールドケース』のフォーマット権利を正式にワーナー・ブラザースから購入し、制作したものである。

本国版はかつてWOWOWで放送され、お客様に愛され続けた人気シリーズである。なぜ、『コールドケース』の日本版を制作したのか。それは、海外ドラマを数多く放送し、海外ドラマファンを多数持つWOWOWだからこそ出来る、新たなシリーズドラマへの挑戦をしたかったからである。世界的に大ヒットした海外ドラマのテイストやテーマに近づけて制作するのはなく、正式にワーナー・ブラザースと組むということも大きな目的であった。その上で、ある試みを行った。それは、シーズン1、2共に全編4KHDR制作に踏み切ったのだ。約10年前の海外ドラマを、今日日本で蘇らせる意義として、日本のテレビ界における、最高峰であり最先端の技術を駆使したかったのだ。それは、憧れ続けた海外ドラマのスタイリッシュで美しいルックを日本チームでも出

来るのではないかと、という挑戦でもあった。監督には「SP」シリーズの波多野貴文監督を、撮影監督には『シン・ゴジラ』で日本アカデミー最優秀撮影賞を受賞した山田康介氏を迎え、撮影に臨んだ。『コールドケース』シリーズの醍醐味は、未解決事件を掘り起こす主人公たちが生きる現代のシーンと、事件に関わった人たちの真実が明らかになっていく過去シーンが行ったり来たりするところである。本作では、各話描くそれぞれの時代に合わせて、レンズやカメラを選定し、時に16ミリ白黒フィルムを使用するなど、とことん映像にこだわり続けた。その効果は抜群で、スタイリッシュな世界観の中に、過去を生きる人々の感情は淡く蘇り、現代を生きる人々の感情は臨場感をもってダイナミックに描かれている。

テレビ技術は日々進歩を遂げ、今はまさに4K、8Kとテレビの過渡期となっている。その過渡期に出遅れることなく、むしろ先頭を歩き続けるために、スタップと共に研究とデイスカッションを重ね、最新の技術と向き合っている。そのことは、プレミアムペイチャ

ンネルであるWOWOWにとって大切なことであり、常にお客様に最善の環境と最強のコンテンツを提供するために続けなければならぬ挑戦なのだ。

最後に、WOWOWに入ってから最初に感銘を受けたことがある。それは、連続ドラマW『ハンドラ』や『空飛ぶタイヤ』を制作し、WOWOW社会派ドラマを作り続け、ドラマW枠を発展させた青木泰憲プロデューサーの言葉である。

WOWOWはお客様第一主義であり、ドラマ作りはサービス業なのだ、と。前述したように、ロケ弁ひとつとってもお客様から毎月頂いている視聴料から支払っている。つまり、前金を頂いてドラマを作らせて頂いているようなものなのだ、と。だからこそ、我々は失敗は許されない。一度失敗したら簡単にお客様は解約してしまう。そのためにも常に最善を尽くし続けなければならないのだ、と。

その意識は、兼ねてから自分が作りたいものとお客様が見たいものは必ずしもイコールではないのかもしれない、という疑念を抱いていた私の気持ちをすつきりさせる言葉でもあった。私たちWOW

OWプロデューサーは、制作会社のベテランプロデューサーやあらゆる監督たちに比べて物作りの経験値は低いかもしいれない。しかし絶対的な強みがある。それは、誰よりもお客様の嗜好を研究し続け、知っているのだということだ。スポンサーがいらないからこそ、直接顔の見えるお客様に対し、優良作品を届け続けなければならぬ。そして同時に、ひとりの製作者として、ものづくりを志すものとして、放送で流れて終わるものではなく、視聴者の心に、テレビ界に、日本の文化に残っていく作品を作り続けたいと常々願っている。



岡野真紀子さん

*WOWOWは視聴料をいただいている契約者を《お客様》と呼ぶ。

*新作『コールドケース2』真実の扉
〜今年10月に放送予定。